

To be disposed or not to be—that is the question

住商コンピュータサービス 新村秀一

1. 人生を悩ませるもの

世の中にはさまざまな人がおり、それを類型化する基準も種々雑多ある。そのなかで、日常生活の一断面において、次のような分類もあるのではなかろうか。

- 1) 物を容易に棄てられる人
- 2) 物を棄てきれずに抱えこむくせに整理整頓のへたな人
- 3) 整理学にたけた人

私の知っているさる年配の経営者は若いころから旅行好きで、俳句や写真の腕もプロ級である。自宅には旅先で撮った厩大な風景・風物の写真がアルバムに整理され天井にとどかんばかりである。しかも適切なメモが添えられているので、何年か前の旅行でも、あたかも昨日のことのような解説になって語られるのを何度も拝聴したことがある。このような方であるから、青年のころ従軍した南方戦線などで詠んだ次の句などは、臨場感をもって現在でもその口から語られる。

パイヤの種瀉に吐き南航す
 月中天 密^{ジャンク} 林巨いなる静けさに
 妻子あり兵に月夜の遠砦(きぬた)

このようなわけで、旅行中に収集したその土地土地の小石にさえも、その石面に達筆でデータをかき生命を吹き込まれているので、主なき^{あるじ}後は供養塔の1つも作らなければと考えている。しかしこのような3)に属する人は稀と確信している。

たまの日曜日に、書斎の机にうず高く積まれた

書類や狭い本棚からはみ出した書籍を前にしている私の姿を想像願いたい。整理のため棄てようかと思ひ頁をめくるうちに、また必要になるのではないかと思ひなおして元にもどすという「囚われ人の無益な作業」を笑える人は、読者の中に何人いますか？

実にORこそは、このように悩めるタイプ2の人に解決策を提示すべきではないでしょうか。しかし私の体験では、この重症患者は加藤秀俊先生の「整理学」を読んだくらいでは、いっこうに全快しないのであります。

2. あなた、古い下着をいつ棄てますか？

私のような棄てることの不得意な人間は、生活空間に制限がなければ、地球上をガラクタで埋めつくすことでしょう。大阪の寮(1LDK)から東京の寮(約4.5畳)に移ったときも、入社以来の古いコンピュータの出力結果とともに大学時代からの書籍をダンボールにつめ、東京の寮の空き部屋に放置して、のうのうしていました。しかし、つけは退寮のさいに一度にやってきました。夜遅く寮の廊下にガラクタを並べ、選別しようとしたのですが、どうしていいのかまったくわかりません。このようなとき、人間の視野はほんとうに狭くなり、まわりが暗くなります。

私は棄てられて悩んだことは学生時代に経験しましたが、棄てることで深刻に悩んだ最初の記憶は、この東京の寮時代が最初でした。

たとえば、バーゲンで買った1000円くらいのワイシャツを100円でクリーニングに出すことを想像してください。10回クリーニングに出せば新しいワイシャツが購入できます。つまり、クリーニングに出さず洗濯機で洗うことにして、10回も洗濯すればそのワイシャツは棄ててもかまわないはず。真剣に悩みましたが、どうしても合理的

な行動がとれません。最近のワイシャツは10回くらい洗濯機でしごいてもビクともしません。かくして、合理的行動の機会を失なったワイシャツは漠然とした美的価値判断で着るのがはずかしくないあいだは、着つづけられました。そして、古い下着とともに徐々に使用頻度が少なくなり、タンスに滞納されることになりました。「なぜ、棄てないか」ですって？ それは、着ようと思えばまだ着られて、棄てるのが「もったいない」からです。考えますに、われわれは小学校時代、日本が一樣に乏しく、貧しかった最後の世代です。古い下着で作られた雑布で、小学校の床掃除をした記憶が今でもあります。見おぼえのある下着が、古雑布としてぼろぼろになっていくのを見るのは、なんとも奇妙な感じがしたものでした。

すなわち、幼年時に人間の脳に刻み込まれた生活態度が、美的価値判断や合理的な行動をにぶらせ、古下着の山を築いたのではないかと考えています。かくして、大学での下宿生活のために新調した衣類は、入社以来約5年ほど出口のないままストックされることになりました。

古着の山をみながら何とかしなければと時々思いましたが、それほど追いつめられてはいませんでした。しかし、幸いなことに解決策が1977年にやってきました。はじめてトロントで開かれた医療情報国際会議に出席し発表する機会に恵まれました。自分にとっては、最初で最後の晴れ舞台のように思えました。そんな重要な期間に、ホテルの一室でみじめたらしく洗濯なんかできます？ 私は発表当日等の晴れの日には新しい下着を着ることにし、それ以外の日は古着でいく作戦をたてました。2週間分の衣服がトランクの大部分を占めました。そして、旅行の終りには古着の代りに土産がトランクを占領しました。

3. 海外で古下着を棄てることの経済分析

国際会議で古下着の処分法を発見して以来、現在ではそれに悩まされることはなくなりました。

ここで、その経済的な分析をしたいと思います。

- 1) 海外旅行の費用を時間で割ったものが時間コストになります。1回の洗濯には少なくとも1時間かかります。この分が直接効果になります。代替案として旅行用の紙下着の費用が古下着の効用と考えることもできます。
- 2) 間接効果としては、トランクのスペースを買ったことになります。また着用済みの下着をトランクに入れていることの不快感や、洗濯をしなければという義務感があります。

しかし、以上のべたことの何よりも、海外で下着を棄てるのが私にとって一種の儀式として生活のハレ(祭り)を飾る行動に置き換わったことです。「もったいない」という日常感覚が、ハレの日の舞台装置として何のこだわりもなく棄てられることの爽快さは人にはわかりません。これは私1人のお祭りであり、思い出であります。

「病膏肓に入る。」とはこのことでしょうか。生活から祭りがなくなり、一方では日本中が豊かになり、私は毎日がハレの日のように酔っぱらっています。しかし、国際会議はサラリーマンの身の上では思うように行けません。そこで、思い立って昨年秋の小樽のORの学会でお祭りをやりました。「何を」ですって？「決まっていますよ。ワイフが処分するといっていた背広を、発表後、北海道の地に寄進することにしました」これによって、本学会は私にとって特別なものに昇華することになりました。

4. 私の整理学

人生の一大命題であった古着の処分法の発見以来、古い思想、古い書籍の整理学を模索しています。いくつかの案を実行していますが、紙面の都合とまだ未完成ですので、また別の機会にと考えています。